

Title	周徳清は大都を見たか : 『中原音韻』の新研究・其六
Author(s)	佐々木, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 11 p.73-p.86
Issue Date	1994-08-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79643">https://hdl.handle.net/11094/79643</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 周徳清は大都を見たか

『中原音韻』の新研究・其六

佐々木 猛

### 1. 所謂「大都における論争」、寧氏の説

1985年に刊行された寧繼福著『中原音韻表稿』はB5版355ページにおよぶ大冊である。新発見の訥菴本『中原音韻』によって『中原音韻』を証したもので、巻首に中古音を注した音節表を冠し、巻尾に再構音を注した一字索引を附載した、『中原音韻』研究の一大成果であるということができる。今後の研究はこの書のうちたてた基礎の上に立って行われることになる。

しかし議論の余地が全くないわけではない。特に周徳清が元の都・大都に赴き、彼の地で行なわれた正音をめぐる論争の中から『中原音韻』を完成させたというのが如きはその顕著なものである。

周徳清の生涯について寧氏は次のようにまとめている。

大約十七・八歳、他開始創作，過着“歌台舞榭”“詩酒疏狂”的生活。從伝下来的詩文尚能依稀辨認他盤桓於廬山・潯陽・大都・吉安等地的足迹。

周徳清一面從事樂府創作，一面潛心探討樂府創作的方法・音律和語言規範。當時的詞壇，問題不少，在音律与語言上存在着混亂，使人無所適從。泰定年間，在大都展開了一場關於“正語作詞”的論争。周徳清極力主張：“欲作樂府，必正言語，欲正言語，必宗中原之音”。泰定甲子（1324）秋九日，他的名著『中原音韻』在論争中誕生。

未幾，周氏回江西。“留滯江南”十七八年。這期間，他曾修訂旧稿。直到至正元年，即公元1341年，賴朋友羅宗信等奔走，『中原音韻』一書才在吉安刊行。而周徳清已經65歲了。（注1）

ここで周徳清が足跡を残した地として指摘している「廬山・潯陽・大都・吉安」のうち、今日に伝わる「詩文」から確認できるのは「廬山・潯陽・吉安」のみであり、「大都」については周徳清が訪れた痕跡は全くないのである。（注2）かれが「大都」に赴き、かの地で「正語作詞」をめぐる一大論争を展開して、その成果として『中原音韻』を完成させたいというのは、後に述べるように『中原音韻』正語作詞起例の第20条などに見える「天下都会」という語にもとづいて

のことであった。

寧氏はいう。

従第20条和第22条所記，可以看出，泰定甲子前後，在大都，有一場大論争。論争の中心問題は：正語作詞の依拠是什麼？即什麼是漢語の標準音？有兩派：一派可称之爲“泥古非今”派，他們堅持以正統韻書爲準。一派可称之“自然之音”派，主張以活的語言中原之音爲標準，他們是革新派。周德清是革新派的代表人物。（注3）

大都の論争以『中原音韻』の成書・伝抄・出版而告終。

泰定甲子之爭，對漢語之發展，對戲曲藝術的繁榮，有深遠影響。它可算一次漢語規範化運動，對漢民族共同語的形成與發展起了推進作用。（注4）

『中原音韻』是大都の論争中写成的，它所記錄の中原之音即是大都話。（注5）

また同年に刊行された王力の『漢語語音史』の第7章「元代音系（1279－1368）」も次のようにいう。

周德清『中原音韻』應該代表大都（今北京）の語音系統。周氏雖是江西高安人，但是他在大都居住久，而且是搞戲劇的，他的『中原音韻』必然是根拠大都音的。元曲用韻与『中原音韻』完全一致，足以証明『中原音韻』是大都音。（注6）

周德清は大都において活躍し大都において『中原音韻』を編んだので、その結果としての『中原音韻』は当然大都の音を代表すると主張するのである。

わたくしはかつて『中原音韻』の序文及び「正語作詞起例」の訳注を作った時、この書が吉安を中心とする江西の文人グループの中で成立したであろうことを述べたが（注7）、この考えは今も変わらない。

1983年に出版された李新魁『中原音韻音系的研究』も『中原音韻』は大都ではなく江西において作られたという。

詳考周氏撰作『中原音韻』的過程，很難說他的工作是在大都進行的。事實上正可能是在江西家鄉中進行。（第2章《中原音韻》所代表的音系）。（注8）

李氏のこの説は『中原音韻』に附せられた諸序の内容にもとづいて立てられているのであるが、

わたくしは更に他の材料をも援用してこの説を補強しようと思うのである。

## 2. 「不」字について、景德鎮のこと

『中原音韻』の7真文の上声に一字のみから成る「76不」の小韻がある。この字については従来知られることはなく、嘯餘譜本は「不」に作り、謝天瑞の『通用中原音韻』の如きは「未然」という注記をつけているほどである。

ところが訥菴本『中原音韻』（注9）の「校勘記」には次のようにいう。

丁聲樹同志指出：

「不」音同「腭」。

朱琰『陶説・陶冶図説』：「石産江南徽州祁門縣坪里・谷口二山，……土人藉溪流設輪作碓，舂細淘淨，製如土磚，名曰白不。」下注云：「敦上声，凡造瓷泥土，皆從此名，蓋景德土音也。」（《翠琅玕館叢書》本，卷65）

又紐秀『觚罇』：「粵人以截土作墊爲不。」（『筆記小説大観』本）

現代客家方言裏仍有「不」字，讀上声（見『客話七言雜字』）。（注10）

つまりこの字は景德鎮（注11）で製作される磁器の原料となる白色の土片を表わす彼の地の方言であるというのであるが、そのことは18世紀初頭の宣教師によっても報告されている。

小林太市郎訳注『中国陶瓷見聞録』に収める「耶蘇会宣教師ダントルコール神父の書簡、同会中国およびインド布教部理事オリー神父あて、饒州1712年1日附」と題する長文の手紙がそれである。（注12）

その第二章「胎土、釉料および成形」に次のようにいう。

瓷器の胎は二種の土の合成する処にして、その一は白不子（pe・tun・tse），他は高嶺（kao・lin）と呼ばれ居り候。後者には多少輝ける微粒の混ざるあるも、前者はただ白くして触るれば極めて滑らかに有之候。饒州より景德鎮へ向け大いなる運搬船の多数が瓷器を積み込んだため遡江致し候と同時に、殆んど同数ほどの子舟が、孰れも輒の形に固められたる白不子及び高嶺を載せて、祁門より下江致し居り候、即ち景德鎮にては、瓷器に必要とする如何なる原料をも産出せざる事に有之候。白不子は、その粒子甚だ微細にして、石坑より堀り出せる岩塊を其の形としたるものに外ならず候。……これ等をば、其の形と色との故に白不子と呼び申し候。（注13）

この「白不子」はダントルコール神父が見たまの姿で今日も存在している。小林徹・山本紀

一『景德鎮紀行』所載の写真36・40などに鮮明に写されているブロック塀ほどの大きさの白い土の塊がそれである。(注14)

江西の景德鎮に固有の陶土を表わすこの「丕」の字を『中原音韻』が収めるということは、この書がほかならぬ江西の地において成ったということを示唆するのではなかろうか。このことをほかの資料から見てみようと思う。

### 3. 『中原音韻』の序文を書いた人々

『中原音韻』に冠せられた各序は、以下に見るように、すべて江西にかかわる人々の手に成っている。(注15)

#### A. 虞集序（前奎章閣待書学士）

虞集は江西崇仁の人。1272-1348.

#### B. 歐陽玄序（翰林学士）

歐陽玄は湖南瀏陽の人。その先は廬陵（吉安）に家す。1282-1357。(注16)

#### C. 周徳清自序

周徳清は江西高安の人。1277-1365.

#### D. 羅宗信序

羅宗信は江西青原（吉安）の人。

#### E. 瑣非復初序

瑣非復初は西域の人。泰定年間に江西吉安に住んだ。

訥菴本『中原音韻』の巻末にはさらに「訥菴書後」があり、それには「正統辛酉冬12月朔盱江訥菴書」という。陳晨「漢語音韻礼記四則」によれば訥菴は盱江（江西南城）の人・左瑯（1389-1458）である。(注17) なお正統辛酉とは1441年のことである。

### 4. 『中原音韻』に見える人物と地名

次に『中原音韻』の序文及び「作詞起例」に見える人物（各序の作者は除く）と地名を考えると、それがすべて江西及びその周辺地域に限られていることが分る。(注18)

a. 人物

a.1. 青原の蕭存存（江西吉安）

「周德清自序」に

青原蕭存存，博学，工於文詞，每病今之樂府，有遵音調作者，有增襯字作者，……泰定甲子，存存託友張漢英，以其說問作詞之法於我，予曰，言語一科，欲作樂府，必正言語，欲正言語，必宗中原之音，……因重張之請，遂分平聲陰陽，及撮其三聲同音，兼以入聲派入三聲，……葺成一帙，分為十九，各之曰中原音韻，并起例以遺之，可與識者道，

とあり、また「周德清後序」にも

泰定甲子秋，予既作中原音韻并起例，以遺青原蕭存存，

とある。

「正語作詞起例」8では次のようにいう。

中原音韻の本内，平聲陰如此字，陽如此字，蕭存存欲鋟梓，以啓後学，值其早逝，泰定甲子以後，嘗寫數十本、散之江湖，其韻内，平聲陰如此字，陽如此字，陰陽如此字，……今既的本刊行，或有得余墨本者，幸毋譏其前後不一，

a.2. 清原の曾玄隱（江西吉安）（注19）

「正語作詞起例」3にいう。

余與清原曾玄隱言，世之有呼屈原之屈，為屈伸之屈字同音，非也，

a.3. 亳州の孫德卿（安徽亳州）

「正語作詞起例」18にいう。

亳州友人孫德卿長於隱語，謂中原音韻三聲，乃四海所同音，不獨正語作詞，

a.4. 張漢英

a.1. に引いた「周德清自序」に見える。周德清と青原の蕭存存の共通の知人であることから

恐らくは江西の人であろうと考えられる。

また『嘉靖吳江縣志』巻17や『至順鎮江志』巻17によれば、至順2年（1331）に吳江の都目に任ぜられ、また鎮江路呂城の税司大使であったことが知られるが、同じ人物であるか否かは分らない。

a.5. 臨川の陳克明

「正語作詞起例」定格の「一半兒」の評にいう。

一樣八首，臨川陳克明所作，俊詞也，

b. 地名

b.1. 吉 (吉安)

b.2. 螺山 (吉安の北にあり、南に贛江を臨む)

b.3. 鷺渚 (白鷺渚。吉安市内を流れる贛江にある中洲)

以上は「周德清後序」に見える地名である。

信哉，吉之多士，而君又士之俊者也，・・・予作樂府三十年，未有如今日之遇，宗信知某曲之非，復初知某曲之是也，拳頭四顧，螺山之色，鷺渚之波，為之改容，

「羅宗信序」にも「吾吉」という言葉が見える。

世之共稱唐詩・宋詞・大元樂府，誠哉，・・・矧吾吉素稱文郡，非無賞音，自有樂府以來，歌詠者如山立焉，未有如德清之所述也，

b.4. 吉安龍泉縣（江西遂川）

「正語作詞起例」の「作詞十法. 2. 造語. 不可作. 張打油語」に

吉安龍泉縣，水渰米倉，有于志能，號無心者，欲縣官利塞其口，作水仙子，示人，自謂得意，

とある。

## 5. 周徳清の散曲に詠まれた地名

更に今日に残る周徳清の作品に詠みこまれた地名を考えることにする。

いま『全元散曲』の周徳清の条に収められた詞曲に見える地名を抜き出してみると以下の通りである。（注20）《 》は間接的に詠みこまれたもの、或いは目前の叙景であるとは考えられないものを示す。

### a. 小令

「正宮」塞鴻秋

・潯陽即景

其の1. 「潯陽」江西九江  
「長江」  
「淮山」

其の2.

《霸橋》 陝西長安  
《剡溪》 浙江省曹娥江の上流（嵊縣）  
《藍關》 陝西商縣

〔中呂〕滿庭芳 （注21）

・看岳王傳 《錢塘》  
《西湖》  
・張俊 《錢塘》

〔中呂〕紅綉鞋

・郊行.

其の1. 《桃葉渡》紅蘇江寧  
《杏花村》

其の2. 「江山」

〔越調〕天淨沙

・舟阻女兒港 「廬山」江西九江.  
「孤山」江西鄱陽湖中の島、鞋山のこと.  
「女兒港」江西九江の東南にある、女兒浦ともいう。



〔越調〕柳營曲

- ・冬夜懷友                      《汀洲》福建長汀  
                                    《剡溪》

〔雙調〕沈醉東風

- ・有所感。其の2。              「長江」

〔雙調〕蟾宮曲

- ・送客之武昌                      《武昌》湖北武昌  
                                    《鄂渚》湖北武昌  
                                    《黃鶴樓》湖北武昌  
                                    「廬山」江西九江  
                                    「白鹿洞」江西廬山
- ・別友。其の1。                  「吳楚」  
                                    「江山」

b. 套數

〔南呂〕一枝花

- ・遺張伯元                      「吳楚」  
                                    《江淮》  
                                    《圯橋》江蘇邳縣の南

〔越調〕鬪鶴鶩

- ・雙調                              《渭水》  
                                    《臨潼》など多数
- ・贈小玉帶                      《匡阜》江西九江  
                                    《荊山》湖北襄陽の西

このうち眼前のものとして詠みこまれた地名を整理すると、「廬山、潯陽、孤山、女兒港、白鹿洞」など、すべて江西九江の地に集中していることがわかる。「長江、江山、淮山、吳楚」などはそれがどの地を指しているのか特定できないが、いずれも江南地域のどこかであるといっても誤りはなかろう。

眼前のものとしての地名を詠みこんだ三首は以下の通りである。

〔越調〕天淨沙「舟阻女兒港」はその題が示すように、作者が今まさに江西九江の鄱陽湖の女兒港に舟を係留している時にその眼前の情景を詠んだ作なのであろう。

廬山面已難尋，孤山鞋不曾沈，掩面留鞋意深，不知因甚，女兒港到如今，

〔正宮〕塞鴻秋の「潯陽即景」の第1は

長江万里如練，淮山数点青如澱，江帆幾片疾如箭，山泉千尺飛如電，晚雲都變露，新月初學扇，塞鴻一字來如線，

という詞であり、江西九江の潯陽の風景を描写したものであると考えられる。

〔雙調〕蟾宮曲の「送客之武昌」は江西九江の地において武昌に赴く友を送った時の作である。

折垂楊都是殘枝，詩滿銀箋，酒勸金巵，自在廬山，君遊鄂渚，兩地相思，白鹿洞誰談旧史，黃鶴樓又有新詩，撚斷吟髭，笑把霜毫，滿寫烏絲，

この三首の作はいずれも同時代の楊朝英の編になる『朝野新聲大平樂府』にも周徳清の作として収められており、信頼してよいものであると考えられる。

そしてこれらによれば当時周徳清が住まいしていたのは原籍のあった江西高安ではなく、また「文化の都わが吉安」として『中原音韻』にしばしば登場する江西吉安でもなく、実は長江を臨む江西九江の地であったと推測できるのである。鄱陽湖に面したかつての女兒港の附近に今も「周家老屋」という名の集落が確認できるのは興味深い。（注22）ちなみに周徳清の故郷は江西高安の「老屋周家」という村である。

## 6. 周徳清が大都を訪れた可能性

ここで改めて周徳清が元の都・大都を訪れた可能性を考えてみよう。かれが大都を訪れ彼の地に住んだとするのは『中原音韻』正語作詞起例の第20条の次の語にもとづいてのことであった。

余嘗於天下都會之所，聞人間通濟之言：世之泥古非今，不達時變者衆，呼吸之間，動引廣韻為證，寧甘受缺舌之誚而不悔，亦不思混一日久，四海同音，上自縉紳講論治道，及國語翻譯，國學教授，言語，下至訟庭理民，莫非中原之音，不爾，止依廣韻呼吸・上・去・入聲，姑置未暇殫述，略舉平聲，靴（許戈切）在戈韻，車・邪・遮・嗟，却在麻韻，……如此呼吸，非缺舌而何，不濁中原，盡使天下之人，俱為閩・海之音，可乎，

この「天下都會之所」の言葉が大都を指していると考えていたのであった。

もしそうだとすると『中原音韻』の虞集の序文に見える次のような言葉はどのように解すればよいのであろうか。

余昔在朝，以文字為職，樂律之事，每與聞之，嘗恨世之儒者，薄其事而不究心，俗工執藝而不知理，由是文律二者，不能兼美，……當是時，苟得徳清之人，引之禁林，相與討論斯事，豈無一日起余之助乎，惜哉，余還山中，眊且廢矣，徳清留滯江南，又無有賞其音者，

虞集は大徳初年に大都に上り、その6年（1302）には大都路儒学教授を授かり、泰定の初には翰林直学士に任ぜられ、また国子祭酒を兼ねるなど、南方系の文臣として中央において重きをなした。特に中国文化の理解者であった文宗トブティムール（在位1329-1332）の信任をうけ、しばしば外任を申し出るが許されなかった。

はじめに引用した寧氏の意見では、この虞集の序文は、泰定元年（1324）に大都において行なわれた「正語作詞」をめぐる論争に参加して、その結論として『中原音韻』を完成させた後に、江西に帰っていた周徳清を指しているのであり、「徳清留滯江南」とは虞集が京官を辞して江西に帰ってから当地にいた周徳清を見出すまでの十七・八年のことを指すのであるというのが、わたくしはこのような見解に同意しない。

周徳清は恐らく江西の地を遠く離れたことはなかったのであろう。そして文宗の崩御のあと病を理由に官を辞して故郷の江西に帰った虞集によって元統元年（1333）以降に見い出されたのであろう。これについては李新魁氏もいうように、瑣非復初の序文が有力な根拠となりうるのである。それには次のようにいう。

如大徳天壽賀詞普天樂云，……音亮語熟，渾厚宮樣，黃鐘，大呂之音也，跡之江南，無一二焉，吾友高安挺齋周徳清，……所編中原音韻，并諸起例，……作詞有法，……所作樂府，……以余觀京師之目，聞雅樂之耳，而公義曰，徳清之韻，不濁中原，乃天下之正音也，徳清之詞，不惟江南，實當時之濁歩也，然徳清不欲矜名於世，青原友人羅宗信，能以具眼識之，求鋟諸梓，噫，後輩學詞之福耳，西域拙齋瑣非復初序，

瑣非復初は西域の人、中国に来て大徳の間（1297-1307）に大都にいたことがあった。もし周徳清がかつて大都において天下の正音を定める論争に参加して活躍していたとすれば、「京師を見たわたしの目、雅樂を聞いたわたしの耳で公正に論じて、周徳清の韻は中原のみならず天下の正音である。周徳清の詞は江南のみならず実に當時に獨歩するものであるといえる」

という言葉がここで改めて瑣非復初によって発せられる必要があろうか。

また、周徳清みずからも散曲の大家・張可久（注23）に贈った詞のなかで「わたしは呉楚の地にももれているが、君は江淮の地で活躍している」と詠んでいるし、（注24）「送客之武昌」の詞においては「わたしは廬山に留まり、君は鄂渚に赴く」といい、自らは江西九江にとどまって湖北武昌に赴く友を送ったときのことを歌っている。これらの言葉はいずれも周徳清という逸材が江西に埋もれていたことを物語っている。

そしてその『中原音韻』の「後序」には次のようにいうのである。

泰定甲子秋，余既作中原音韻并起例，以遺青原蕭存存，未幾，訪西域友人瑣非復初，讀書是邦，同志羅宗信見餉……予曰，信哉，吉之多士，而君又士之俊者也，嘗游江海，歌臺舞榭，觀其稱豪傑者，非富即貴耳、然能正其語之差，顧其曲之誤，而以才動之者，鮮矣哉……予作樂府三十年，未有如今日之遇，宗信知某曲之非，復初知某曲之是也，拳頭四顧，螺山之色，鷺渚之波，為之改容……明當尽携音韻的本并諸起例，以歸知音，

この序は『中原音韻』の成立についての貴重な証言であるといえる。（注25）

周徳清は羅宗信とともに当時吉安にいた瑣非復初を訪問し、そこで宴が持たれたのであるが、その宴席で「わたしは樂府を作って三十年にもなるが、今日のようなすばらしい人々に出会ったことはない。羅宗信が曲の誤りを発見し、瑣非復初はそれを正すことができた」といって、「顔を挙げて四方を見渡せば、螺山の色も鷺渚の波も、そのために姿を変えて一層美しく見えた」のであった。先に見たように「螺山」や「鷺渚」が江西吉安附近の景勝の地であることから、「後序」に記されたこの宴がまさに吉安の地において持たれたことが知られるのである。周徳清のこの訪問の目的は「勲業の相門」である瑣非復初に『中原音韻』の出版の援助を請うことにあったと考えられる。（注26）羅宗信はその橋渡しの役割をしたのであろう。

以上すべての資料が周徳清の足跡は江西の地を出ていないこと、かれの著した『中原音韻』という書は江西の文人グループのなかで江西の地において成立したということ、を物語っているのである。（注27）

青木正兄の『元雜劇序説』は鐘嗣成の『録鬼簿』（注28）によって雜劇の作られた時代を初期・中期・後期に分け、時代の推移とともに雜劇の作者が北から南に移っていく様子を述べている。

既にして蒙古が南宋をも滅して天下を一統するや、北方の雜劇は新興の勢を以て南宋の雜劇を征服し、戲曲上に於ても南北一統の業を成すに至った。作者に就て之を見るに、

一統前は殆ど北人のみであったが、一統後は却て南人が多くなり、北方の作者すら南方に來り住む者あり、遂に雜劇の中心が南方に移ったかの觀を呈した。……故に「録鬼簿」に見えて居る所では、中期以來北方には一人も作家が無いに等しい。(注29)

これは散曲の作家についてみても同じような状況であった。(注30)

周德清の活躍した時代はこの中期から後期にかけてであったが、当時は重要な作家はもはや大都ではなく南方に住まいしていた。そのような作家にしてみれば、北方漢語の実際の字音によって韻脚を形成している散曲や雜劇を作るさいには、しかるべき字音の規範が必要とされたのであろう。この要求に答えて編まれたのが『中原音韻』なのであった。

1994年3月25日

## ・注

1. 寧繼福『中原音韻表稿』p. 1.
2. 寧氏が指摘した地名のうち、周德清の「詩文」に就いて確認できる「廬山・潯陽・吉安」のいずれもが江西のものであることは後に述べるように注意してよい。
3. 『中原音韻表稿』p. 184。
4. 『中原音韻表稿』p. 185。
5. 『中原音韻表稿』p. 185。
6. 王力『漢語語音史』p. 308。
7. 佐々木猛「中原音韻・正語作詞起例・訳註」p. 68. p. 84。
8. 李新魁『《中原音韻》音系の研究』p. 39。
9. 中華書局、1978年。「校勘記」は陸志韋・楊耐思の著作である。
10. 訥菴本『中原音韻』冊下「校勘記」p. 5。
11. 元代には浮梁州と称した。
12. 平凡社・東洋文庫・363、1979年。
13. 小林太市郎訳注『中国陶器見聞録』p. 71。
14. NHKブックス、カラー版C16、1981年。
15. これらの序文から『中原音韻』の出版の経緯を考えると以下のようになる。

かねてより最近の詞曲のありかたに不満を持っていた青山の蕭存存は、泰定元年(1324)に友人の張漢英に託して正しい作詞の方法を周德清に尋ねた(このとき周德清はおそらく江西の地にいた)。周氏はこれに一つ一つ丁寧に答えるとともに、張氏の請いをいれて『中原音韻』と「起例」の原稿を蕭存存に贈った。蕭氏はこれを出版するつもりであったが、はからずも間もなく亡くなってしまった。それから暫くして周氏は青山の羅宗信とともに江西吉安に瑣非復初を訪ねて宴をもった。そこで羅宗信と瑣非復初の知音に感嘆して、改めて『中原音韻』の定稿と「作詞起例」をすべてかれらに委ねることにした。これを受けた羅宗信と瑣非復初によって『中原音韻』はおそらく江西の地において正式に出版されたのであった。これは虞集が京官を辞して江西に帰った元統元年(1333)から周伯琦が『暇堂周氏宗譜』の序文を書いた至正2年(1342)までの間のことであった。寧氏は1341年のことであるという。

このような事情を考慮に入れて『中原音韻』の諸序を考えてみると、次注に見るように歐陽玄の序を後世の偽作であるとすれば、長らく大都の朝廷にて重きをなしたこのたび帰郷した大作家である虞集の序文を最初に置き、次に周德清の自序を置き、『中原音韻』を刊行した羅宗信と瑣非復初の序文を最後に置いたのは誠に理にかなった配列であるといえる。

16. 楊耐思『中原音韻音系』は「訥菴本跟瞿本内容基本一致、只少歐陽玄的一篇序。這序不見於歐陽氏『圭齋文集』，可能是

後人偽託的。瞿本的這篇序排在虞集序の後半頁，獨用隸體書寫，訥菴本此處空白，更顯得這篇序不可靠」といい (p. 6)，歐陽玄の序が假託されたものであることをいう。この序文は楽律をよくした者として三国呉の周瑜と宋の周邦彦をあけて「今徳清兼二者之能，而皆本於家學如此」というが誤りである。このことも歐陽玄の序文の偽作説を補強する根拠となるであろう。因みに『録鬼簿続編』はこの誤りを襲って「宋周美成之後」という。

17. 陳晨「漢語音韻札記四則」 pp.25-26. を参照。
18. ここではその根拠となる文章を引用するにとどめる。翻訳と考証は佐々木猛「中原音韻序訳註」及び「中原音韻・正語作詞起例・訳註」を参照されたい。また「正語作詞起例」の「定格」40に引用する詞を馬致遠の作であると明記するが、このような例はここには含めない。
19. 清原という地名は確認できない。周徳清がその曾玄隱と直接語り合っていることから、江西吉安の青原を指しているものと考え。佐々木猛「中原音韻・正語作詞起例・訳註」 pp.66-67. を参照。
20. 隋樹森編，中華書局，1981年。 pp.1333-1348.
21. この2首は『中原音韻』『正語作詞起例』に載せるが作者の名を記さない。いまは『詞林摘艶』巻一に周徳清の作とあるのによる。
22. 江西省測繪局『江西省地圖冊』（中華地圖学社出版1990年） p. 22.
23. 張可久，字は小山（一説に名は伯遠，字は可久，小山と號した）。慶元（浙江鄞県）の人。路吏・首領官などの小吏となり、至正（1341-1367）の初には七十余歳で昆山の幕僚であった。馬至遠・貫雲石・廬摯・馬昂夫ら当時の著名な作家たちと交遊があった。今日最も多く作品の伝わる散曲作家である。浙江の名勝は殆んどその作品に詠まれていて、西は洞庭から長沙にまで足を伸ばしていることがわかる。（倉石武四郎編『宋代詞集』『詞人小伝』，中国古典文学大系，平凡社，1970年）。
24. 『全元散曲』 p. 1342. 周徳清「南呂・一枝花。遺張伯元」に「我淹呉楚，君頭江淮」とある。
25. 注15を参照。
26. 吉川幸次郎『元雜劇研究』上篇「元雜劇の作者」「後期の作者」にも、「最後に、これら後期の『才人』（佐々木注、雜劇の作者）も、或いは当時の大官の庇護を受けていたことを指摘しておきたい。演劇への関心は一般には冷却したとはいえ、大官巨公、ことに北方出身の巨公のうちには、なお声伎に愛着を抱くものがあり、『才人』のあるものは、その庇護の下に生活したらしい。・・・かの周徳清のために『中原音韻』を刊行し、周氏から知音も巨公としてたてまつられている西域の瑣非復初なる色目人も、『余は勲業の相門なれば、貂蟬は座に満つ、伶女の国色を列し、名公の俊詞を歌う』と、『中原音韻』の序で述べているように、作者たちのパトロンであつたらう」という。
27. それならば周徳清はどのような音系を基礎にして審音の作業を進めたのかという問題が残る。これについては別稿で考えてみようと思う。
28. 『録鬼簿』には至順元年（1330）の自序が冠せられている。編者の鐘嗣成はもと開封の人、のちに杭州に移り住んだ。周徳清とはほぼ同時代の人であったが、この書にも周徳清のことは記録されていない。雜劇散曲の作者を豊富に記述している鐘嗣成が趙孟頫や虞集、張可久らの名は記録しても周徳清の名を挙げていないということから、周徳清は杭州においてもよく知られていなかったということが出来るのではないであろうか。
29. 青木正兒『元雜劇序説』 pp.353-354.
30. 隋樹森『元人散曲概論』（『中華文史論叢』1982年第2輯）。なお宋浩慶の『元明散曲』は前期・後期に二分している。

## ・文献表

- 青木正兒 1936『元雜劇序説』（『青木正兒全集』第4巻、1973、春秋社）。
- 倉石武四郎 1970『宋代詞集』平凡社（中国古典文学大系20）。
- 陳晨 1990「漢語音韻札記四則」（『漢字文化』1990年第4期）。
- ダントルコール（小林太市郎訳注）1979『中国陶甕見聞録』平凡社（東洋文庫363）。
- 江西省測繪局 1990『江西省地圖冊』中華地圖学出版。
- 李新魁 1983『中原音韻音系的研究』中州書画社。
- 寧繼福 1985『中原音韻表稿』吉林文史出版社。
- 宋浩慶 1987『元明散曲』上海古籍出版社。

- 宋濂等 1976『元史』地理志、中華書局。  
 隋樹森 1981『全元散曲』中華書局。  
 隋樹森 1982『元人散曲概論』（『中華文史論叢』1982年第2輯）。  
 王力 1985『漢語語音史』中国社会科学出版社。  
 小林徹・山本紀一 1981『景德鎮紀行』NHKブックス（カラー版C16）。  
 楊耐思 1981『中原音韻音系』中国社会科学出版社。  
 吉川幸次郎 1948『元雜劇研究』（『吉川幸次郎全集』第14巻、1968、筑摩書房）。  
 鐘嗣成 1957『録鬼簿』古典文学出版社。  
 周德清 1978『中原音韻、附中州樂府音韻類編』中華書局。  
 佐々木猛 1978『中原音韻序訳註』『均社論叢』6。  
 佐々木猛 1979『中原音韻・正語作詞起例・訳註』『均社論叢』8。

## ・『中原音韻』関連年表

- ・周德清（1277—1365）89歳
  - ・虞集（1272—1348）77歳
  - ・周伯琦（1298—1369）72歳
- 1297（大徳1）成宗
- 1302（大徳6）
- 07（至大1）武宗
- 1311（至大4）仁宗
- 12（皇慶1）
- 14（延祐1）
- 15（延祐2）
- 16（延祐3）
- 19（延祐6）
- 20（延祐7）英宗
- 1321（至治1）
- 23（至治3）晋宗
- 24（泰定1）
- 28（天曆1）文宗
- 29（天曆2）
- 30（至順1）
- 33（元統1）順帝
- 35（至元1）
- 1341（至正1）
- 1342（至正2）
- 1351（至正11）
- ・ 瑣非復初、大徳年間に大都にて「天寿賀詞普天楽」を見聞する。
  - ・ 虞集、大都路儒学教授を授かる。
  - ・ 科擧復活。進士100人（馬祖常・欧陽玄・黄潛ら）。
  - ・ 趙孟頫、翰林学士承旨を拝す。
  - ・ 『陽春白雪集』この頃までに出版される。
  - ・ 周德清、吉安に瑣非復初を訪ねる。
  - ・ 奎章閣学士院を開く。虞集「奎章閣記」
  - ・ 鐘嗣成、『録鬼簿』初稿に序す。
  - ・ 虞集、官を辞して江西に帰る。
  - ・ このころ周伯琦、奎章閣にて皇帝の書画鑑賞に侍す。
  - ・ 虞集序に「余還山中、眊且癡矣」という。
  - （『漢書』孫宝伝に「年七十諍眊」というがこの年虞集は70歳。）
  - ・ 周伯琦「周氏宗譜序」に「高安周德清者、余宗叔也、著中原音韻伝世」という。
  - （『中原音韻』は1333から1342までの間に刊行されていた。）
  - ・ 楊朝英『太平樂府』鄧子晋の序。（巻首に『中州樂府音韻類編』を冠す）

（1994年5月2日 受理）